

食育キャラクター活用による食育推進(1) —食育キャラクター「食まるファイブ」の活用—

西村友希* 丸山浩徳** 西村敬子***

*愛知教育大学大学院

**東海学園高等学校非常勤講師

***家政教育講座

Utilization of Characters for the Promotion of Dietary Education(1) — Utilization of Dietary Education Character, “SHOKUMARU FIVE” —

Yuki NISHIMURA*, Hironori MARUYAMA** and Takako NISHIMURA***

* Graduate School of Education, Kariya 448-8542, Japan

** Part-Time Lecturer Tokaigakuen High School, Nagoya 468-0014, Japan

*** Department of Home Economics Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

I. はじめに

私たちの周りにはキャラクターグッズがあふれ、子どもたちはもちろん、OLやビジネスマン、シルバー世代までがキャラクターグッズを持っている。生活のあらゆる場面で様々なキャラクターは自らの存在を主張し、我々の生活に定着してきた。特に子どもたちの生活においてキャラクターは欠かすことができないものとなっている。そして、祖父母を含めた家族全員が一緒に楽しむためのパイプ役としてキャラクターがその一端を担っている。

この子どもたちを取り巻く生活の中で現在大きく問題とされているのが、偏食や肥満、過度の瘦身志向などの食生活に関するものである。これは、様々な食状況の変化や食に関する問題が発生し、その影響が子どもたちにも及んでいるからである。そのため、『食生活指針(2000年)』を始め、『食育基本法(2005年)』、『食事バランスガイド(2005年)』等が次々と策定され、国全体をあげて食育が推進されている。

子どもたちが生涯にわたって健康で豊かな生活を送るためには、大人から提供される「食」に頼るだけではなく、子ども自身が現在の食の問題について関心を持つことが必要である。そして、自分の食生活を振り返り、自分の体に合わせた食事の判断・選択ができるような、知識・技能・態度を身につけ、毎日の生活の中で活用する力が必要とされている。健康や栄養、食品の安全、食料自給率、食文化など、食に関する知識

について、現在の子どもの認識度では十分とはいえず、食育の必要性は高いと考えられる。

国の施策の1つとして「食事バランスガイド」の普及が図られており、食事バランスガイドのコマはスーパーやコンビニエンスストアにおいて、ポスターや弁当等のパッケージに表示され、子どもたちが目にする機会が増えている。そこで、先行研究ではこの食事バランスガイドのコマをもとに、子どもたちが栄養に関する知識を分かりやすく、また楽しく学ぶことのできる食育教材「栄養指導手袋」とメッセージソングを開発した。¹⁾

この栄養指導手袋と歌を用いることは、子どもたちが食に興味を持ち、楽しく学ぶことに有効であった。しかし、栄養について学ぼうとする態度を子どもたちに定着させ、食への興味を持続させることには課題を残した。

そこで、栄養指導手袋をキャラクター化することで、子どもたちがキャラクターに興味を持ち、食への関心を高めることができるのではないかと考え、食育キャラクター「食まるファイブ」を誕生させた。そして学校や社会において「食まるファイブ」を活動させることで、食育キャラクターによる食育推進を行った。

II. 研究方法

小学校、大学等の活動に分けて、食育キャラクター「食まるファイブ」を活動させ、食育推進への有効性を

検討した。

Ⅲ. 結果及び考察

1. 小学校における「食まるファイブ」の活動

食育キャラクター「食まるファイブ」を小学校に導入する際、『劇』として紹介することが子どもたちにとって印象に残り、わかりやすく、適当な方法であると考えた。劇のシナリオは【バランスよく食べることの大切さ】を伝えることを目的としており、あらすじは資料1の通りである。

劇に登場するそれぞれのキャラクターが視覚的に分かるように、本研究室において、「食まるファイブ」と「メタボ大魔王」たちの衣装（マント）を作製した。

劇上演後、児童の感想から「食まるファイブ」の食育への有効性をみた。

資料1 劇のシナリオのあらすじ

A 初めに、5人の「食まるファイブ」の色、名前、食事バランスガイドの出身エリア、仲間の料理をそれぞれ、「食まるファイブの歌」を流して紹介する。

B 訪問先の小学校にメタボ大魔王とメタボ4将軍（肥満将軍、高血圧将軍、糖尿病将軍、コレステロール将軍）が子どもたちをメタボリックシンドロームにしようとしてやってくる。これを阻止するために「食まるファイブ」がメタボ将軍たちと闘う。

C しかし、「りきまる」が昼ご飯を食べた時に野菜を残してしまったため、メタボ将軍にやられてしまう。そこで、ベジまるから野菜をもらい、食べたことで食事バランスがよくなって元気になる。

D そして、食まる5人が手袋に合体して究極の力（パワー）を出し、メタボ将軍をやっつける。しかしメタボ大魔王だけは逃げてしまう。

2. 本学における「食まるファイブ」の活動

本学の本部正面や図書館等に、「食まるグッズ」や「食まるの活動」の情報をパネル等で展示してもらい、学生や職員、学校訪問者に「食まるファイブ」をアピールした。また、本学職員の有志により学外に「食まるファイブ」についての情報発信を行ってもらった。

3. その他の「食まるファイブ」の活動

食育研究会等で「食まるファイブ」を紹介するなど、地域の団体や企業と協力して、「食まるファイブ」の普及を図った。

1. 小学校における「食まるファイブ」の活用

子どもたちにとって「食まるファイブ」はまだなじみのないキャラクターである。劇の効果をあげるため、まず劇を上演する一週間ほど前から学校で給食の時間等に「食まるファイブの歌」を流し、子どもたちに「食まるファイブ」という名前とキャラクター各々の名前を覚えてもらった。

各学校の食育のテーマや状況に合わせて、劇の内容や演出の方法を工夫し、子どもたちにとってより効果がある導入方法を検討した。

以下に、各小学校への「食まるファイブ」を導入した例を示す。

① 刈谷市立富士松東小学校の場合（児童数530人）

日時：2008年2月6日

富士松東小学校では、4・5・6年生と保護者を対象に学校保健委員会において『食は体と心を育てる』というテーマの講話の中で、表1に示すように「食まるファイブ」の劇が上演された。その様子を写真1に示した。

表1 富士松小学校の場合

配役	メタボ大魔王と将軍：本学学生 食まるファイブ：「りきまる」本学学生、残りの4人は児童
衣装	マント（食まるファイブ、メタボ4将軍、メタボ大魔王）
シナリオ変更点	なし
攻撃アイテム	なし



写真1 富士松東小学校の劇の様子

保健委員会終了後の児童の感想は資料2に示す通りである。

感想を見ると、A男のように「栄養の話は難しく、話ばかりでつまらないだろうなと思っていた」という感想を述べた児童が数人いた。B子のように、栄養の

話を劇や歌、キャラクターで示したことで「面白かった」「楽しかった」「わかりやすかった」と書いている児童が多かった。

また、C子のように、食まるファイブの5人が揃うことでバランスのよい食事がとれるといった、劇の内容を理解した児童が多く見られた。自分の食生活について具体的に何が足りないのかを客観的に見ることができる児童や、欠点を克服しようとする児童、バランスが整っている給食に着目し、給食センターの方々に感謝する児童も見られた。

4年生の感想では、食まるファイブの劇の上演の目的に見合った感想が多く、導入方法を劇にしたことが適当であり、内容についても適当であったと考える。

しかし、5、6年生では劇よりもその後の講演会の感想を書いている子が多くなり、「食まる五人がそろろうとバランスがよく、体によいことがわかった。」という感想が多かった。高学年にとっては、この劇の内容では易しすぎるため、違ったアプローチの方法を考える必要がある。

また、感想に「食まるファイブ」「食べまる」「べじまる」など、「食まるファイブ」やそれぞれの食まるの本来の名前と異なったものを書いている児童がいた。これは、D子の感想からわかるように自己紹介の部分に食まるファイブの歌を流して紹介したため、言葉が聞き取りにくく、よくわからなかったことと、児童が劇に参加したため、セリフを減らしたので、観ている児童側には、劇全体の印象が薄くなってしまったのではないかと考えられる。

資料2 保健委員会終了後の児童の感想

A男：	最初は（栄養の話は）むずかしい、大人の人の話でつままないだろうな。と思っていたけど、楽しくてはなたいにちゃんと覚えたなと思ってしまっほど楽しかったです。（4年生）
B子：	前に食についてのことを栄養士さんから教えてもらったけど、それを気にしてそのままの同じような生活をしてきたけど、今日キャラクターを使ったりして楽しく学べたのでよかったと思います。（5年生）
C子：	今日学校保健委員会に参加してみて、「食の大切さ」について学びました。何か1つでも欠けてしまうと、コマがちゃんと回らなくて、そのためにも「食まるファイブ」が全部必要なんだなあと思いました。私は「ほねまる」と「べじまる」が欠けていると思います。野菜は嫌いじゃないけど好んでは食べないし、家ではあまりカルシウムをとりません。だから私のコマはたぶん、うまく回ってないと思います。これからはちゃんとコマを回せるようにきちんと食べたいと思います。（6年生）
D子：	（前略）食まるファイブの歌が流れているとき、あんまり聞こえなくて、何をいっているのかあんまりわかりませんでした。でも、バランスよく、バランスをくずさずに食事をしたいと思いました。（4年生）

② 刈谷市立日高小学校の場合（児童数591人）

日時：平成20年11月23日

日高小学校では、1・2年生を対象として、学校保健委員会の中で、表2に示すように「食まるファイブ」の劇が上演された。その様子を写真2、3に示した。

「食まるファイブ」の劇終了後の児童の感想を、資料3に示した。

表2 日高小学校の場合

出演者の配役	食まるファイブ：学生 メタボ大魔王：学生 メタボ4将軍：日高小学校の先生
衣装	マント（食まるファイブ、メタボ4将軍、メタボ大魔王）
シナリオの変更点	Cの場面の野菜を残してやられる役を「りきまる」から「ほねまる」に変更。
攻撃アイテム	メタボビームにクラッカーを使用。 食まるパンチでは筒状の布を使用し、手袋に合体したことがわかりやすくなった。 メタボ4将軍、食まるファイブがそれぞれの武器を持ち、攻撃シーンを演じた。



写真2 メタボ大魔王とメタボ将軍



写真3 合体した「食まるファイブ」

感想をみると、E子のように「給食を残し力が出なかったほねまるにならないように、自分は給食を残さず食べる、好き嫌いをなくす」という感想が多かった。また、F男のように「給食には食まるファイブがそろっていることに気づいた」という児童や、「嫌いなものもしっかり食べて、次にメタボ大魔王が来たら食まるファイブと一緒に倒す」という児童もいた。劇の中のキャラクターが経験した出来事から自分の食生活を見直すことができていた。

さらに、G子のように劇の内容や食まる一人ひとりの仲間の料理を覚えており、「食まるが五人そろると体によいことがわかった」と書いている児童も多かった。中には、H子のように「ピーマンは嫌いでも同じベジまるの友だちで違う野菜なら好き」と書いている児童もいた。これらの感想は、それぞれの食まるのことをしっかり把握していないと記述できないものである。

また、日高小学校での劇では対象が小学校低学年であったこととメタボ4将軍が担任の先生であったことから、富士松東小学校に比べ、セリフが聞こえなくなるくらい児童の反応があった。担任の先生方がメタボ4将軍役になりきり、熱演してくださった影響で、I男のように将軍と食まるが戦う場面について書いている児童が多かった。また、5色がそろるとよいということだけではなく、「5色をそろえることでメタボ将軍にとりつかれないようにしたい」、「メタボ将軍をやっつけたい」と、さらに考えを深める姿がみられた。

劇の出演者や演出方法を変えることで、児童の印象がどこに残るかに違いがあることがわかった。

資料3 「食まるファイブ」の劇終了後の児童の感想

E子： 食まるファイブをみてかんげきしました。これからはえいようのバランスにちゅういしてしょくじをします。なかでも「ほねまる」がきゅうしょくをたべてなかったのがいけないとおもいます。わたしものこしたけど、こんどからはぜんぶたべます。(2年生)
F男： メタボだいまおうだけにながってしまったのはちょっとごんねんだ。つぎにきたときは、ほくもしょくまるみたいになってたおすのをてつだってやろうとおもう。だから、ほくのすきなほねまるとにくまるいがいもがんばってたべて、げんきでつよい子になりたい。(1年生)
G子： このげきを見て、リーダーのりきまる、やさいのべじまる、肉や魚、まめ、たまごのにくまる、フルーツのフルーツまる、牛にゅう、ヨーグルト、チーズのほねまるををしっかりまいにち食べるとメタボせいじんをおいはらうことができるんだなとげきでわかりました。このげきはすごりかいできるからわかりやすいです。これからは5つをたいせつにごはんをたべていきたいです。(2年生)
H子： うちのほねまるのチーズがきらいです。あと、べじまるのピーマンとにんじんがきらいなので5色揃わないので、あまりからだによくないです。でも、べじまるのトマトときゅうりとかばちゃは大きな食べものです。(2年生)
I男： げきをしてくれてありがとうございます。べんきょうになりました。メタボリック大魔王たちはおもしろかったです。(2年生)

③ 設楽町立田口小学校の場合(児童数105人)

日時：2008年2月28日

設楽町立田口小学校では、全校児童を対象に教育講演会を開き、その中で表3に示すようにパワーポイントと先生方による「食まるファイブ」の紹介を行った。

表3 田口小学校の場合

出演者の配役	メタボ4将軍：田口小学校の先生 食まるファイブ：人形
衣装	マント(メタボ大魔王、メタボ4将軍)
シナリオの変更点	今回は劇ではなく、パワーポイントを使用しスライドで食まるファイブの物語を紹介した。Bの場面のみ、先生方に出演していただいた。食まるファイブは人が演じるのではなく、人形を使用した。 Cの場面の野菜を残してやられる役を「りきまる」から「ほねまる」に変更。

資料4 食まるファイブの劇終了後の児童の感想

J男： 五人の中で好きな〇〇まるは…ほねまるです。ほくは乳製品もすきだし、たたかうとき剣をつかうのがかっこいいと思ったからです。(5年生)
K男： おもしろかったことは、食まるファイブがメタボしょうぐんとたたかったところです。とくにわざがおもしろかったです。(2年生)
L子： 五色のいろがそろわないと力が出ないことや、バランスよくたべないとえいようがかたよってふとってしまったり、ほそかたりすることがよくわかった。食まるファイブというキャラクターがあったからとてもわかりやすくおぼえることができた。(6年生)

終了後の児童の感想を資料4に示した。

感想を見ると、J男のように自分がどのキャラクターが気に入ったかを書いている児童が多かった。今回はパワーポイントによる食まるファイブの紹介を行った。絵や人形で食まるファイブを認識しているので、「かわいい」「かっこいい」という感想が得られたと考えられる。

攻撃シーンにはメタボ4将軍として先生方に出演してもらったため、K男のようにその部分について書いている児童がいた。

設楽町立田口小学校において、劇ではなく、映像で「食まるファイブ」を紹介したことで、文字と映像で「食まるファイブ」の説明ができ、L子のように「食まるファイブ」をキャラクターとして認識しやすく、わかりやすかったと思われる。しかし、劇よりは印象が薄い場合、「5色がそろるとよい」ということがわかって、ストーリー自体は心に残りにくいのではないかと考えられる。

上記に示した以外にも以下の表4の小学校にて劇を上演した。

食まるファイブの劇終了後の児童の感想を見ると、「楽しかった」、「面白かった」という児童が多かった。また、「食まるファイブの5人が揃うことでバランスのよい食生活ができること」を理解した児童、自分の食生活を見直し改善しようとする児童が見られた。また、「食事のバランスのことをキャラクターで勉強することで、わかりやすい、楽しい、これなら自分もできる」と書いている児童もおり、「食まるファイブ」の劇

表4 劇を実施した小学校

小学校名	実施日	児童数	対象
知立市立 知立西小学校	2007年12月	801名	全校児童
尾張旭立 白鳳小学校	2007年6月30日	672名	全校児童
豊川市立 金屋小学校	2008年6月18日	363名	1年生 (61名)
岡崎市立 大雨河小学校	2008年10月18日	14名	全校児童
名古屋市立 千種小学校	2008年10月27日	218名	全校児童
三好町立 南部小学校	2009年1月27日	464名	全校児童



写真4 本部における食まるグッズの展示

の上演の効果を実感することができた。

各小学校に合わせた内容に工夫し、先生方が役になりきり、熱演すること、また、児童の知っている人が劇に出演することにより子どもたちに強い印象を与えることができた。

しかし、劇の内容から、「野菜を食べなければいけない」と捉えた児童や、「好き嫌いをしてはいけない」、「好き嫌いすることがそのまま体に悪い影響を与える」、「一日でも5人そろわないといけない」と捉えている児童もいた。もちろん、野菜を食べること、好き嫌いをなくしていくことは大切であるが、ただ、そのことが絶対であるというメッセージと捉えられてしまうことには気をつけなければいけない。また、今、好き嫌いがあったり、給食を残しており、バランスが取れていない児童、食べられない食べ物がある児童が「不安である」「心配である」と書いていた。これから少しずつでも意識して改善していけばよいこと、食べられないものがあったとしても、他の食べ物で補うことができることなどを、劇の後で科学的根拠に基づいた補足が必要と考えられる。

また、「栄養や食品」、「食と環境」や「食と心」、「食の文化伝承」などについて、補足が必要なことから、子どもと「食まるファイブ」とのかかわりが一過性で終わるのではなく、常に生活の中に「食まるファイブ」を根付かせ、もっと子どもたちに食のバランスの大切さをアピールしていく必要があると考える。

2. 本学における「食まるファイブ」の活動

本学事務職員有志の協力を得て、学生や職員・学校訪問者へのアピールを目的に、写真4・5に示すように、愛知教育大学の本部や図書館に「食まるファイブ」のコーナーを設置してもらい、「食まるグッズ」を展示してもらった。

また、写真6に示すように本学で行われた生協フェスタ&食フェスタでは、食堂前のリラックススペースに「食まるファイブ」のブースを設置し、本学学生に



写真5 図書館における食まるグッズの展示



写真6 生協フェスタの様子

「食まるファイブ」の紹介と説明を行った。イベントを知っていてやってきた人も、偶然通りかかった人も、「食まるファイブ」をみて、「かわいい」と興味を示し説明を聞いていた。また、本部や図書館の展示を見て、「食まるファイブ」の存在を知っており、「もっと詳しく教えてほしい。」と聞きにきた人もいた。展示と同時に、展示だけではわからない部分を、説明できる機会をもつことも大切であると考えた。

写真7に示すように、本学で開催されている『子ども祭り』に「食まるファクトリー」として参加し、地

域の小学生たちに「食まるファイブ」を紹介した。子どもたちが楽しみながら「食まるファイブ」を知ることのできるよう、キーホルダー作りやぬり絵など、体験活動を取り入れた。参加者は、本学学生の説明を聞きながら、「食まるファイブ」に興味を持ち、短時間でもキャラクターの名前を覚えてくれた。「今日の夜、食まる五人がそろそろように食べる。」と言った子どももあり、小学校に導入すると同時に、このような機会に子どもたちに「食まるファイブ」を紹介することも十分に意味があると思われる。

また、澤田典江氏や大澤有子氏が第16回文部科学省関係機関等教職員駅伝競走大会（2008年11月1日）に



写真7 子ども祭りの様子



写真8 高浜マラソン (2009年1月15日)



写真9 碧南マラソン (2008年12月21日)

「食まるたすき」をかけて参加したり、写真8, 9に示すように田中哲之氏や佐合尚子氏が「食まるファイブグッズ」をつけて碧南市や高浜市のマラソンに参加し、「食まるファイブ」の存在をアピールした。

写真10に示すように、本学職員の落合咲貴氏と鬼澤美紀氏により『第7回大学人コミュニケーション力養成セミナー』（2009年7月31日）において、「食まるファイブ」が紹介された。



写真10 食まるファイブの紹介

また、写真11のように「食まるファイブ応援ガールズ」が結成され、広報活動が行われている。

その他、多くの事務職員の方々からのサポートにより、本学で誕生した「食まるファイブ」が様々なところに紹介され、本学の学生や地域社会に認められてきている。

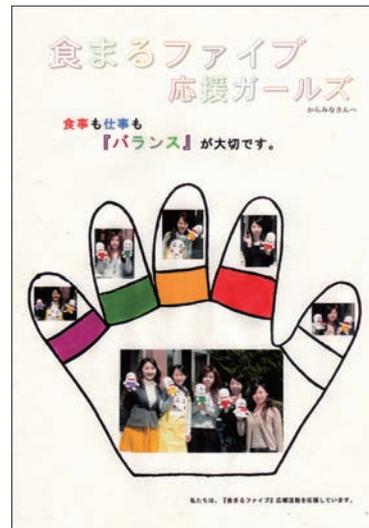


写真11 食まるファイブ応援ガールズ

3. その他の「食まるファイブ」の活動

小学校、大学だけでなく、地域と連携して、「食まるファイブ」の普及活動を行った。

写真12・13に示すように、地域と共同の研究センター「ごはんちゃんと食べよ一会」の方々と連携し、名古屋市のめいきん生協本店で、「食まるファイブ」の絵を売り場に展示してもらい、店舗を訪れた家族に



写真12 売り場の様子①



写真13 売り場の様子②

「食まるファイブ」を紹介するイベントを行った。

(2009年1月6日)

また、写真14に示すように、小学校と地域の企業(株)クレフォートの永井健太氏を講師として迎え、刈谷市立日高小学校において「オムレツの調理実習」を行った。対象は6年生で、レシピは6年生が考案した。1クラス6つの班に分かれ、各班1種類、全部で6種類のオムレツを作り、みんなで試食してどのオムレツがおいしいかを発表した。

「食まるファイブ」とともに調理することを想定し、レシピには食材の横にその食材の仲間の各「食まる」をのせた。そして、おいしいオムレツを上手に作れる



写真14 調理実習の様子

ようになる技術だけでなく、栄養バランスにも着目させた。それによって、どのオムレツがおいしいかを発表する際には、選んだ理由に味の好みだけではなく、栄養バランスや彩りなどをあげる児童がいた。

写真15に示すように、知立市「夏休みチャレンジ教室」において地域の小学生(参加者 26名)とともに「究極の食まるピザ作り」を行った(2009年7月24日)。



写真15 ピザ作り教室の様子

はじめに、「食まるファイブ」を紹介し、5つの色がそろってバランスがよいことを伝えた。そして「食まるファイブ」に扮した本学学生がサポートしながらピザの生地をみんなで一緒に作り、用意した数種類のトッピングの中から、5つの色の食まるの仲間の食材を選ぶように示唆した。

参加した子どもたちは、最初の説明ですぐに「食まるファイブ」を理解して、5つの色をバランスよく取ることの大切さを意識し、トッピングの計画時にはほぼ全員が5色の食まるが入るように記入することができていた。しかし、実際に作った時には計画とは異なり、5つの色がそろっていない子どもがいた。バランスよくのせないといけないと分かっているにもかかわらず、実際には行動に移せないことが分かった。

その他、様々な集会において「食まるファイブ」を紹介した。写真16に示すように、あいちの食育いきいきシンポジウム(2008年10月17日)では会場の一角で「食まるファイブ」の紹介を行った。参加者は、食育に



写真16 講演会での展示の様子

関心の高い人であり、多くの人が「食まるファイブ」に興味を示した。参加者の中には、ぜひ自分も「食まるファイブ」で食育をしたいという申し出があった。

食育キャラクター「食まるファイブ」を誕生させ、子どもたちが楽しくバランスのよい食生活ができるようにするために小学校には劇の上演、本学においては事務職員の協力により学生への情報発信を行った。また地域との連携を通して、多くの人々に「食まるファイブ」を紹介したところ、「食まるファイブ」とともに食について学ぶことは、分かりやすく、楽しく食事のバランスについて学ぶことができ、食育に興味を持たせるきっかけとしては大変効果的であった。「食まるファイブ」は、子どもはもちろん、大人にも親しみの持てるキャラクターであり、小学校では子どもだけでなく教員も興味を持ち、熱心に食育に取り組むようすがみられた。また、地域の人々にも「食まるファイブ」を活用して独自に食育に取り組む姿勢が見られた。

私たちは今、様々なキャラクターに囲まれて生活している。バンダイキャラクター研究所の調査²⁾によると、何らかのキャラクターグッズを持っている人は調査対象者の79%に及んでいる。このことからキャラクターの存在は、食育推進に有効であると考えられる。

本学で誕生した食育キャラクター「食まるファイブ」は、広く人々に受け入れられ、5色そろえてバランスよく食べることの重要性を伝える手段として有効であった。食育は一過性ではなく、継続して行うことが重要である。そして食の知識を身に付けるだけでなく、学んだ知識を実際に生かし、習慣化していかなければならない。これは子どもたちと「食まるファイブ」について学び、「究極のピザ作り」をした際に、バランスよく食べる重要性を理解しながら、トッピングには好みの食材だけをのせる子どもたちが多かったことからよく分かった。子どもたちが食事をする際にバランスのよい食生活を意識するためには、「食まるファイブ」を単なる癒しのキャラクターとするのではなく、毎日の生活をともにする仲間として存在させることが大切である。そのためには「食まるファイブ」が身近な存在となり、常に意識できるようなグッズを作成し、アピールしていくことが重要であると考えられる。

また、「子ども祭り」のように、「食まるファイブ」は短時間でも楽しく簡単にわかるものであるが、やはり短時間では伝えきれない部分も多い。食育に興味を持ってもらうためにも、今後より多くの小学校に「食まるファイブ」を紹介していく必要がある。「ご飯食べよー会」や食育シンポジウムの参加者のように、自分たちも「食まるファイブ」を活用したいという食育サポーターの方々とともに、「食まるファイブ」をより広

範囲の人に紹介し、新しい視点からのアプローチの方法を提案していただくことで更によりよい食育の方法を探りたいと考える。

新学習指導要領には、学校において食育を行うことが示された。将来教員を目指す本学学生に対して、食育についての知識や子どもたちへの教授方法を提案していくことは大変意味があるものであると考える。また多くの人が、「食まるファイブ」を活用し、望ましい食生活ができるようになればよいと考える。

IV. ま と め

食育キャラクター「食まるファイブ」を誕生させて、学校や社会において活動させ、キャラクターの有効性を検討したところ、以下のことが分かった。

1. 「食まるファイブ」を小学校に導入する際は、「食まるファイブ」の劇として導入することが、一番効果的である。劇の中では、学校の先生や児童の知っている大人が参加し、その役になりきることが、子どもたちの反応がよく、より効果的である。
2. 学内で「食まるファイブ」を宣伝することで、教師を目指す学生に食育の一方法を提案すること、また、「食まるファイブ」をより広範囲の人に広めることができた。
3. 「食まるファイブ」の活動を地域と連携して行うことは、地域の人々に「バランスのよい食生活」の大切さを認識してもらうのに有効であった。

謝 辞

本研究にご協力いただきました皆様に深く感謝いたします。

引用・参考文献

- 1) 上村葉子、西村敬子：「子どもが楽しく学べる食育教材の開発—五色指人形手袋と歌の活用—」日本食育学会誌 3巻 1号 pp.73~81 2009年
- 2) 相原博之：「キャラ化するニッポン」講談社現代新書 pp.20 2007年

瀬沼文彰：「キャラ論」STUDIO CELLO 2007年
土井隆義：『個性』を煽られる子どもたち 岩波書店 2004年
伊藤 剛：「テヅカ・イズ・デッド」NTT出版 2007年

(2009年9月17日受理)